

笠置寺彌勒像と笠置曼荼羅

足 立 康

笠置寺に就いては多くの残された問題もあるが、茲では美術史上また宗教史上重視すべき同寺彌勒石像とそれを描いた笠置曼荼羅に就いての管見を述べよう。

笠置寺彌勒像の造顯事情は、寺の縁起に従へば、笠置山に出獵された天智天皇皇子が、彌勒を念じて危難を免れ給ひ、その感謝のためにこの彌勒大石像を彫成されたと傳へられてゐる。しかしながらこの事は當時の文献には見えぬやうであるから、果して天智天皇の御宇頃の製作であるか否やを確め得ないのは遺憾である。この彌勒像造顯の事を記してゐる最も古きものの一は今昔物語であらう。同書は彌勒像造顯の次第を巨細に述べ、該像は化人が皇子を助けて彫成したものと云ひ、また後に東大寺の良辨がこの像を見出して信仰した由をも傳へてゐる。

爾來この傳説は廣く信じられてゐたと見え伊呂波字類抄を初め其他中世の文献にこの説が散見して居り、例へば正治二年の爲八條院三位局於笠置修善願文には

天智之皇子拓基、地勢之勝甲被世、五丈之像、忽形神功於石背、

笠置寺彌勒像と笠置曼荼羅

—

とある。これらの中にあつて帝王編年記が特に造顯年次を限定して、「天智天皇三年甲子、天人降造笠置石像彌勒」と云つてゐるのは、果して何に據つたのであらうか。また貞慶の元久元年十月十七日笠置寺龍華會願文にも

原夫笠置寺者、古先帝代所草創也、其化人刻彫之緣、慈尊感應之德、舉世知識不須復説、

とある。云ふまでもなく貞慶は熱烈なる彌勒信仰者でまた笠置寺中興の開祖であるから、彼は當然笠置彌勒像に就いては最も詳細なる知識をもつてゐた筈である。然るにその云ふところは結局縁起などの大差はない。思ふに貞慶と雖もこの彌勒像に就いては最早正確な事を知り得なかつたのであらう。既に鎌倉初期に於ける貞慶でさへこの有様であるとすれば、今日に於いてそれ以上の事を究めんとするのは頗る困難であらう。

しかし乍ら、上掲諸書の云ふところをよく吟味し、また笠置寺の沿革等を思ひ併せると問題の彌勒像の造顯年代は、假令傳説ほどに古くはないにしても、相當の昔に溯りうるのではなからうか。建仁三年の笠置寺禮堂軒廊等造營狀の中に

石像之緣起舉世所知焉、巖洞之勝絕臨地可觀矣、彼良辨僧正栖息之後、實忠和尚紹隆以來、

とあるのが若し正しいとすれば、彌勒像の存在は少くとも奈良朝までは溯りうるであらう。

現在笠置には弘法大師と關係をもつと傳へられる虚空藏石像が儼存してゐる。その造顯年代は様式手法の上から平安朝もあまり遅くはない頃と見られてゐる。然るにこの石像は、その位置から見ても、亦その傳説等から考へても、彌勒像と同時代に彫成されたとは認め難く、恐らく既に存在してゐた彌勒像から暗示をうけて造顯されたと考へられる。仍つてこれらを同時代のものと看做し、虚空藏像の年代から彌勒像のそれを類推する事は出来ないであらう。



第一圖 笠置彌勒石像現狀

没せり、淺猿敷事也」と縁起にあるが如き状態となり、今は全く畫像を止めず、たゞ空しく大岩壁が仰がれるのみである。

二

笠置寺彌勒石像の形態を示す最古のものは彌勒菩薩畫像集であらう。この畫像集の作られた年代は、その清水寺塔の條に

嘉祥元年戊辰二月十一日始構寶塔、安四佛東方藥師南尺迦西阿彌陀北彌勒、自嘉祥元年至康和三年成二百五十四年、

と見え、また關寺の條にも「自件年至康和三年辛丑成八十年」とあれば、該書が康和三年頃作られた事は明かであら

笠置寺彌勒像と笠置曼荼羅

笠置寺彌勒石像は、古來尊崇されてゐたが、鎌倉時代初葉に於いては、貞慶や宗性の篤く信仰するところとなり、その教界に及ぼした感化は甚大であり、また承元の頃には是に做つて大野の彌勒石像の彫成された事までもあつて、この石像は鎌倉佛教史上重要な位置を占めてゐたのである。然るに惜いかな元弘兵亂の際には「魔風しきりに吹て、本堂の猛火本尊に覆ければ、石像燒隔て、化人刻彫の尊容も埋



圖二第 彌勒菩薩畫像集の圖



圖三第 諸尊圖の圖

者花藏院大僧正寬曉作也」とある如く、寬曉の圖像と校合してあるとすれば、その圖は餘程信頼してもよいものであらう。

尙心覺の諸尊圖像にも笠置彌勒像が見える。この圖は彌勒畫像集のとの系統を異にするものではあるが、その圖様は畫像集のと殆ど等しい（第三圖参照）。この事實は畫像集の圖様が笠置彌勒像の實際に近い事を證明するものと云へよう。

この彌勒像は當初着色されてゐなかつたが藤原時代頃新たに彩色が加へ

う。さてこの畫像集に見える笠置彌勒像は、第二圖に見る如く中央に彌勒立像、その左右に比丘形が侍立して居る。彌勒は蓮花座上に立ち、如來形にしてその衲衣の衣紋線は溫和な曲線をして居り、また比丘形のうち一人は柄香爐をもち他は袈裟の下に鉢様のものを捧げてゐる。この比丘形は誰を現してゐるのか未詳であるが、いづれにしてもこれらの圖様は或程度まで笠置彌勒像の實際を寫してゐるものと思はれる。この畫像集の圖は、同書表紙の裏に「以浮圖委細校合了、浮圖

られた事は、本朝世紀久安五年の條に、得長壽院修理の際その本尊を移動することの可否が問題となつた時、左大將

雅定卿等が反對して

東大寺大佛新以開眼之後、鳥雀犯之、笠置彌勒加彩色之後、靈

驗惟少、准此等例、更不可動、

と云つたとある事から推知されよう。尙これに就いて沙石集に「笠置の彌勒はいろどり奉て後、靈驗御坐さすと云へり、古き佛像はたゞ其のまゝにてあがむる一の様也」と見えてゐるのは寔に味ふべき言である。

笠置寺彌勒石像の形態は大體上述の如きものであるが、茲に不審

に思はれるのは、覺禪抄に見える圖様がこれと異なることである。即

ち彌勒は踏割蓮花座にのり、その衣紋線も著しく異り、また侍立の

二比丘のうち柄香爐をもつ方は全く見えす、しかも他方の一比丘は

袈裟とは無關係に露はに鉢を捧げてゐる。斯くの如く覺禪抄の圖樣

が彌勒畫像集のと異なるのは、單に圖像上の寫し崩れからとは考へ難

い。後の正和元年に轉寫された久原文庫本の彌勒畫像集の笠置彌勒

圖が、よく祖本の圖樣を傳へてゐる事を思ふべきである。これらの事から考へると覺禪抄の圖は笠置の實際を知らず、



第四圖 覺禪抄の圖

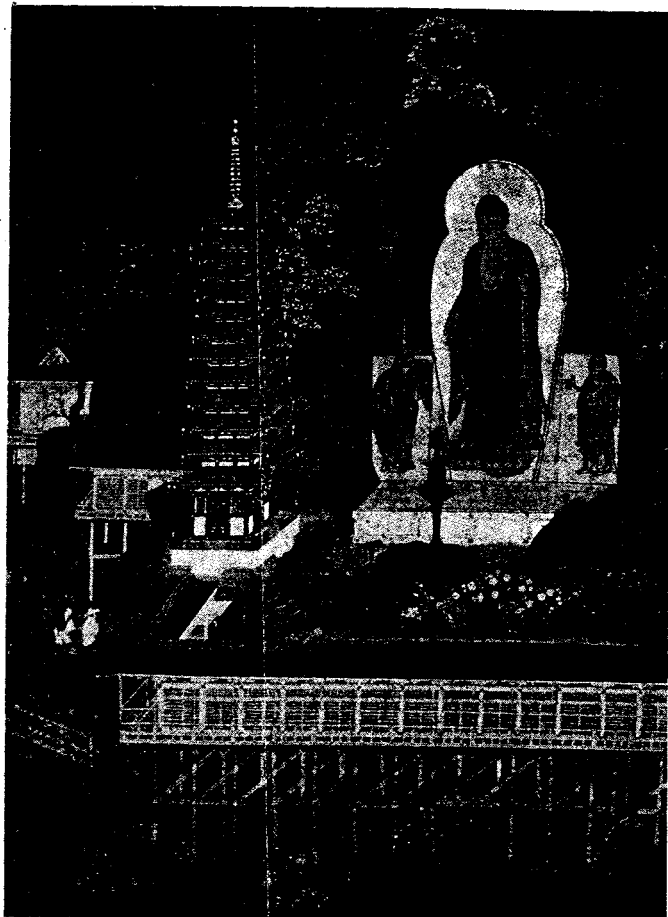


第四家鈔圖の像
第五圖

笠置寺彌勒像と笠置曼荼羅

笠置寺彌勒像と笠置曼荼羅

鎌倉時代の考を以て想像的に描いたものではないかと疑はれる。尙覺禪抄笠置彌勒像のところには書入れがあり、



第六圖 笠置曼荼羅

笠置石像也、元興

寺金堂像同之、但

不似脇士、右僧形

攀袈裟、又左在僧

禮持香呂、

と云つてゐるのは注目

すべきである。即ちこ

の圖には僧形は一人し

かゝるゝのに、文には

二人居るやうに記し、

また圖の右僧形は鉢を

捧げてゐるのに、文に

は袈裟を捧げてゐると

述べてゐる。然るにこ

の文面の示すところは康和の彌勒畫像集の圖様とよく吻合してゐるから、笠置彌勒像に關する正しき説明と見なけれ

ばならぬ。仍てこの覺禪抄自身の説明と異なるその圖様の方は甚だ怪しいものと見なければなるまい。これと共に考ふべきは四家鈔圖像に見える笠置彌勒像である。これに於いては衣紋は畫像集のと同様であるが、蓮座は覺禪抄圖の如く踏割り式となつて居り、恰も兩者の中間に位する圖様を示してゐる(第五圖参照)。この種の系統に屬する圖様が更に一轉化すると即ち覺禪抄圖の如きものになるのであらう。

三



第七圖 大野彌勒像圖
(據奈良縣報告書)

茲に於いて改めて見直さねばならぬのは先頃問題にされてゐた原家所藏の國寶笠置曼荼羅の圖様である。曾つてこ

の圖は元弘燒失以前に於ける笠置寺の實狀を描いたもので、同寺の舊觀を偲ぶべき根本資料であると考へられた事もあるやうであるが、果してかく認めてよいか頗る疑問である。この圖はその描法より見て鎌倉末期を溯り得ぬ事は明かであるが、

先づ第一に不審なのは、これに現れてゐる彌勒像の姿が畫像集や諸尊圖像のとは著しく異り、その面相や髮際に於いても、衣紋線に於いても、蓮花座の形式に於いても、すべて相違してゐる事である。仍て若し畫像集等のものが眞實を傳へてゐるとすれば、この曼荼羅圖の方は笠置彌勒像の實際を寫したものと考へ難い。然らばこの圖は如何にして生じたのであらうか。茲に於いて吾々は大野の彌勒石像を想起する必要がある。大野石像は承元三年の造顯に係り、

興福寺別當次第に「蓋笠置石像以爲規模」とあるやうに、笠置石像に倣つて造られてゐるからその大體はそれに従ひ、細部には鎌倉時代の好尙が取入れられた事であらう。今この大野石像を曼荼羅圖に比較するとそれらが寔によく一致してゐるのに驚くであらう。斯くの如く笠置曼荼羅圖が畫像集像と異り、却つて後の大野石像に合致してゐるのは何を語るものであらうか。思ふに元弘罹災後の或時期に於て笠置山往時の盛觀を描かんとするに當り、その彌勒像に就いては笠置像に倣つた大野像或はその粉本を手本としたのではなからうか。——また若し笠置彌勒石像が再興されたとすれば恐らく同様の手順がとられたであらう。——果して然らば問題の笠置曼荼羅の製作年代は如何に古く見ても元弘を溯り得ぬ事とならう。

尙笠置曼荼羅の製作年代を裏書するものに同寺禮堂の問題がある。彌勒如來感應抄によれば、笠置彌勒石像の前に既に天仁年中僧永眞が禮堂を經營してゐた。この堂宇はあまり立派なものではなく、しかも彌勒像と甚しく接近して居り五丈の尊容を十分に仰ぎ得ぬため、建仁頃から禮堂改造の議が起り、先づ堂の位置を石像から離し、更に建物自身に就いては、建仁の笠置寺奉唱請殊蒙智識助成改造禮堂軒廊等狀に

繼南軒廊、以爲樂所、分北母屋、以爲經藏舞曲之臺聽法之座、

とあるが如く大改造を企てた。吾妻鏡の元久元年四月の條に貞慶が頼朝に禮堂改造の助力を仰ぎ砂金を得たとあるのはこの際の事である。仍つてこの後に於ける禮堂は從來のものより餘程立派になつたに相違ない。前引笠置寺縁起に「本堂の猛火本尊に覆ければ」とある本堂とは、種々の點から見て恐らく禮堂の後身であると思はれるが、この堂宇炎上のため五丈の石像が墮滅したとすれば、これは石像の前面近くにあり且相當の規模をもつものでなくてはならぬ。

然るに今改めて曼荼羅を見るに、石像の前方にある建物は一見したところでは禮堂らしくない（現に國寶略説はこれを廻廊と見てゐる）。尤もこれも禮堂として使へぬ事はなからうが、その形態は感應抄や縁起の文面にも合はず、また事實かゝるものが焼けただけでは五丈の尊像が全く見えなくなる程の損害を與へうるか甚だ疑はしい。仍つて曼荼羅の禮堂圖は元弘以前の實際を寫したものと考へ難い。

斯くの如く笠置曼荼羅が元弘以後の製作によるものとすれば、そこに示された彌勒像の姿は遽かにこれを信じ難く、結局彌勒菩薩畫集等に見える圖様を以て當初の姿を傳へてゐるものと認むべきであらう。

要するに笠置寺彌勒像はこの種の大石像としては最も古く、その構想も彌勒菩薩畫集に見る如く甚だ珍しいものであり、また特に中世に於いては彌勒信仰の中心となり、ひいては大野石等像の造顯を誘致して居り、鎌倉佛教史上重大なる地位を占めてゐたのである。

本稿を草するに當り、彌勒如來感應抄の披見に就いては東大寺筒井英俊師の篤き御配慮を忝うし、また笠置曼荼羅の寫眞に就いては田中一松氏より御高配を賜つた。茲に記して兩氏に深謝の意を表する。